

1975年、部屋を貸していたエミ子が、誰か入らないかと探していた部屋を私が借りたときが初対面でした。1979年3月10日、美容師のエミ子と結婚し、100歳以上長生きしよう！と誓いました。新婚旅行は日田・阿蘇に行きました。エミ子は、大腸がんを切除し、人工肛門を造設、障害者手帳4級を持っていました。えびの高原の硫黄山温泉に入り、エミ子のかかとの肌荒れを治しました。

大分市の貸付資金で自宅玄関にスロープ、トイレと廊下に手すりを設置しました。1983年から生活費は2人の年金、医療費と住宅費は生活扶助で賄ってきました。

認知症・脳梗塞を発症して

2010年11月から私は入院し、エミ子は一人暮らしをしていました。2017年12月にエミ子は認知症を発症し、ヘルパーさん・訪問看護師さんの支援を開始しました。エミ子が生活リズムを立て直そうとしているのが言葉からわかりました。

一人暮らしから有料老人ホーム心との里に入所してすぐの2018年5月16日に今度は脳梗塞を発症し、新別府病院へ救急搬送されました。エミ子は、言葉が続かず、「あれ！なんかおかしいな？」を繰り返していました。話しかけると、「大丈夫」ありがと



大林正孝さん

おおばやし まさたか
1945年生まれ。別府市在住。障害者の生活と権利を守る大分県連絡協議会（障大協）。27歳で進行性筋ジストロフィーと診断を受け、障大協に参加し、事務局長を歴任。現在、病院に入院しながら障害者運動にとりくむ。

最終回 妻エミ子との 40年間の生活

歳。大和撫子のように、大正、昭和、平成を良く生き抜きました。心から愛でてあげました。団子髪で笑みをたたえて、かわいく旅立ちました。臨終にあたって、訪問看護師さんたちがエンゼルケアを行い、エミ子の苦痛を取り除き、穏やかに旅立たせてくれました。

私に代わって看取りに立ち会っていただきました。

訪問看護師さんからレクイエム

「訪問したときにエミ子さんが玄関を鳴らしても出て来なくて、ベランダにまわりました。そうしたら陽

生きる

だまりのなかでチョコンと椅子に座ったエミ子さんがいて、そこには理想的な老後の姿がありました。『日が当たり、あたたかいからベランダに座ってたの。気づかなくてごめんなさいね』。ほほえみながらやさしく、そう言うエミ子さんの様子は、人へのやさしさ

に満ちていて、人を癒す力が溢れていました。」

エミ子の遺志を受けとめて

3月12日、茶毘にふした後は、お骨を杵築市に連れて行き、私の母のお骨と二つ置いて、納骨も一緒にと考えています。

私は、エミ子と誓った100歳をめざし、人工呼吸器を装着して、病院を出て在宅医療を受診しながら、障害福祉制度の支援をうけて地域で自立して、普通に生きていきたいと思っています。エミ子も宇宙から見守っていると思います。



2018年9月15日、長寿を祝う。エミ子95歳心との里にて